

表記による想起されるイメージの違い

— 在日中国人留学生と日本人大学生の調査より (2) —

○余洋・井上弥

(広島大学大学院教育学研究科)

目的

これまで日本人を研究対象とし、日本語の漢字表記、ひらがな表記とカタカナ表記に対するイメージの比較研究は多数されてきている (e.g., 岩原・八田, 2004; 杉島・賀集, 1992)。その結果、漢字はかたい・知的な、ひらがなは柔らかい、カタカナは外国的・モダン、それぞれ独自のイメージを伝えられることが明らかになっている。

ところで、漢字はそもそも中国から伝わってきたものであるため、日中同形語を研究材料とした日本人と中国人のイメージの比較研究もある (e.g., 佐々木, 2010; 張, 2017)。しかし、日中同形語以外の漢字とひらがな・カタカナ表記に対して、日本語学習者はどのようなイメージを持っているのかについては研究されていない。さらに、イメージを測定する代表的な方法とされている SD 法を用いた研究は少ない。

そこで、本研究では、在日中国人留学生 (以下、留学生) と日本大学生を対象とし、SD 法を用いて漢字、ひらがな、カタカナに対するイメージの相違について比較・検討を行うことを目的とする。本稿では、留学生の結果について報告する。

方法

被調査者 A 大学に 1 年以上留学している留学生 41 名を対象とした。平均の滞在期間は 2.2 年であった。なお、これらの被調査者はすべて日本語能力試験一級に合格し、十分な日本語能力を持っていると考えられる。

材料 評定概念は予備調査に基づき抽出された 10 語 (「きれい」「けが」「まんが」「めがね」「りんご」「ぶどう」「きざ」「ついたて」「もくれん」「ゆり」) を 3 表記した 30 項目を用いた。評定尺度は評価性次元として「好きな—嫌いな」「きれい—きたない」「気持ちの良い—気持ちの悪い」の 3 形容詞対、力量性次元として「強い—弱い」「重い—軽やか」「かたい—やわらかい」の 3 形容詞対、及び活動性次元として「親しみやすい—親しみにくい」「読みやすい—読みにくい」「活動的な—受動的な」の 3 形容詞対、合計 9 形容詞対を用いた。質問項目として、「各表記を見て感じるイメージを形容詞対で評定し、あなた

のイメージにあてはまる場所に○をつけてください」と教示し、7 件法で回答を求めた。なお、各項目の最後にその項目の意味が分かるかをたずねた。

結果と考察

因子分析 形容詞対について因子分析 (最尤法、プロマックス回転) を行った結果、第 1 因子は、「評価因子」、第 2 因子は「力量因子」、第 3 因子は「活動因子」であった。「活動的な—受動的な」は負荷量が低いので除いた。

分散分析 すべての因子においてことばの主効果、表記の主効果とこれらの交互作用が有意であった。ここでは、力量因子を例として、分散分析の結果を述べる。10 語の 3 つの表記それぞれの力量因子の得点をプロフィールとして Figure 1 に示した。

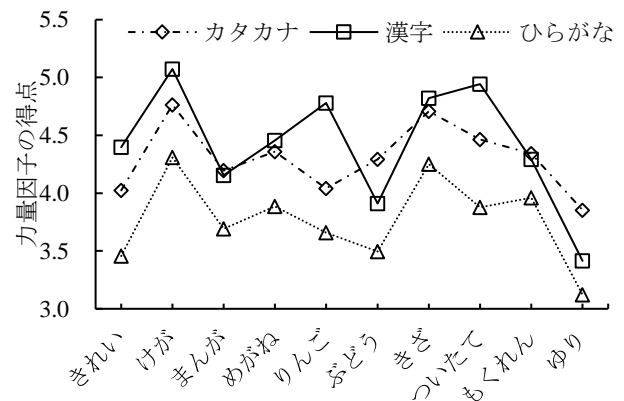


Figure 1 力量因子の表記別プロフィール

ことばの主効果 ($F(9, 360) = 14.85, p < .001, \eta^2 = .11$), 表記の主効果 ($F(2, 80) = 21.06, p < .001, \eta^2 = .08$) とも有意であった。さらに、これらの交互作用 ($F(18, 720) = 3.92, p < .001, \eta^2 = .02$) も有意であった。各効果について多重比較 (Holm 法) を行ったところ、概して、ひらがなよりカタカナ、カタカナより漢字の方が力量性が高いことがわかった。しかし、カタカナ表記と漢字表記の「きれい」「まんが」「めがね」「きざ」「もくれん」「ゆり」は違いがなかった。また、漢字表記とひらがな表記の「もくれん」「ゆり」は違いがみられなかった。

この結果から、留学生が日本語言葉に対するイメージは表記によって異なることが明らかになった。今後、日本人大学生を比較していく。